

研究タイトル:

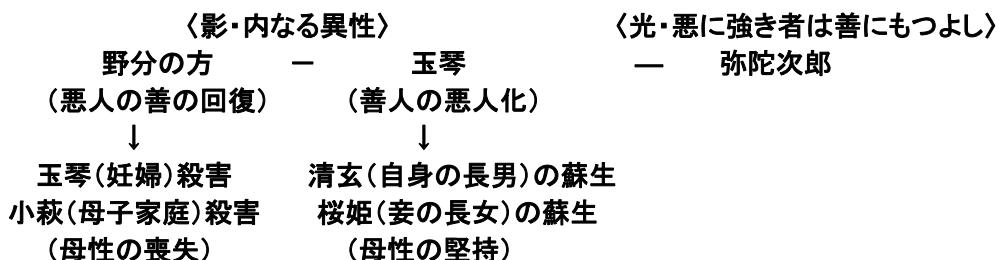
## 近世叙事文芸の幻想性



氏名:	善塔 正志／ZENTOH Masashi	E-mail:	zentoh@akashi.ac.jp
職名:	特任教授	学位:	修士(文学)
所属学会・協会:	日本近世文学会		
キーワード:	幻想性, 怪異性, 近世文芸		
技術相談 提供可能技術:	・怪異・幻想文学の紹介・読解		

 研究内容: **近世叙事文芸の作品論**

怪異の文芸が隆盛であったのは文化文政期であるが、その背景には社会不安による現実逃避の意識があったと思われる。社会や人の闇を可視化するとはいっても、グロテスクで生々しいその再現というよりは、想像の上での恐怖と共感を与えるものであった。(たとえば『曙草紙』など、人物造型は〈役〉として次のように類型化される。そのため少しも怖くないのである。お化けの浮世絵なども歌舞伎俳優をもとにした。)これは現代とよく似ている。



高校生用の国語の検定教科書に採られている村上春樹の「鏡」など、百物語に擬した会話体を用い、ドッペングエルガーを材料にしているが、その主人公である「僕」は、六条御息所(『源氏物語』)・桜姫(山東京伝『曙草紙』)・累(三遊亭圓朝『真景累ヶ淵』)といった堂々たる二重身の系譜の上にあるといって良いであろう。

また漢文では同じく検定教科書に「盤瓠」(六朝志怪の一つ『搜神記』にあるとされる)が載っている。これは馬琴が「南総里見八犬伝」中、典拠であることを示した作品である。近世の代表的伝奇作品が用いた異類婚姻の習俗的心象を読ませるのである。

現代の我々は、近世の怪異文芸にきっと現代社会と自身の姿を見ることであろう。すなわち殺す者と殺される者、それを傍観する者に分類される社会を、そしてそのいずれかにあてはまる自身の姿を捉え、これらの作品を再評価することになるのではないか。

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	